

## 1. 傘を差す理由

歌を唄っている。

地表を、この街を等しく洗い流す雨。

り鳥は、暑い日差しにも負けず、口々にう鳥は、暑い日差しにも負けず、口々にう鳥は、暑い日差しにも負けず、口々にいる木々。木々の力強さを称えるかのよ

空色の、花柄の傘が私のお気に入りは穏やかに降る。

傘を差していれば、雨に濡れることは でいなかった頃。それらが生まれ出る前 のこと。体に不釣合いな、大きな傘を差 して歩くのが好きだった。

のずるい感情にすら気付いていなかった空の色の傘。花の柄の傘。幼い私。空の色の傘。花の柄の傘。幼い私。空の色の傘。花の柄の傘。幼い私。

かった。

かった。

かった。

雨はいつの日も、必ず上がってくれた

2. 今の私

。 教室の窓から、何の気なしに外を眺め

入学してから、もうすぐ半年経とうとしている高校。足元が落ち着かないような感覚も薄れて、制服も体に馴染んできた時期。空の青さは、日差しの強さで濁った時期。空の青さは、日差しの強さで濁って見えた。遠くに見える山裾に引っかかっている入道雲だけが、真っ直ぐに見詰めることの出来る夏の残滓。それ以外は、目を逸らしても強引に視界へと入りは、目を逸らしても強引に視界へと入りは、目を逸らしても強引に視界へと入りは、目を逸らしても強引に視界へと入りは何とかして欲しいところではあった。夏休みが終わって、二学期が始まって、まだ二週間しか経っていない。夏はまだまだ残っているようだ。

146

長らせる。

明日に備えることになる。
でいない私は、家に帰って眠って、またせれば、今日の学校も終わり。部活に入っせれば、今日の学校も終わり。部活に入っけない私は、家に帰って、一日の授業の終わ

確かめる。 離かが足を止めた。顔を上げて、相手を 離に教科書を入れていると、机の前で

てくる相手。数少ない私の友達。「や」と軽く手を上げて、短い挨拶をし

短く揃えた髪の毛を、そのまま適当に短く揃えたという外見が、性格に良く合っている。名前は、千代ちゃん。響きは可でいる。名前は、千代ちゃん。響きは可をらしいけれど、どこか古風な名前。性を名前が必ずしも一致する訳ではないという、ある種のお手本のような子だ。

加減にして欲しいわ」「今日も暑い日だったね。ホント、いい

けど」 にもエアコンとかつけてくれるんだろう 「そうだね。もっと都会だったら、教室

が高くなってしまったから、と。やっていた。都会は温暖化の影響で気温やっていた。都会は温暖化の影響で気温

「羨ましいことねえ」

「で、今日はどうするの?」 感じないのは、才能だと思っている。 がないのは、才能だと思っている。 で、今日はどうするの?」

てくれる。となく毎日私に声をかけてくれる。誘っとなく毎日私に声をかけてくれる。誘っとなく毎日私に声をかけてくれる。誘っないつもと同じ、帰り際の会話。少ない

疲れちゃったし」
「家のことやらなきゃいけないし、少しでも、今日も私の答えは同じ。

談めかして付け加えておいた。それに、お金もあまりないしね、と同

- そう。じゃ、また誘うわ」 「そう。じゃ、また誘うわ」

「ら」と言とこげて、どうトと見ら。仏へと向かおうとした。(彼女はそのまま踵を返して、自分の席)

た。 もつられるようにして、視線を外へ向けもつられるようにして、窓の外を見る。私

日差しは強いまま、何かに遮られてい でくようなその声に、私は短く「うん」 でくようなその声に、私は短く「うん」 を必要が来るわね。 これ」

た通り、雨が降り始めたから。は、良く覚えていない。千代ちゃんの言っは、良く覚えていない。千代ちゃんの言っ

傘を差して歩いている。学校から家への、下り坂。雨は激しさを忘れて、嘘のの、下り坂。雨は激しさを忘れて、嘘のように静かに降り続いている。夕立ちがそろ秋も深まるということ。空が高くなって、風が強く吹きつけるようになれば、この街に短い秋が訪れる。駅前の街路樹が色づけば、あっという間に冬だ。路樹が色づけば、あっという間に冬だの時期の雨が一番好きだった。ゆっくりと静かに振り続ける、優しい雨。

雨で洗われたアスファルトの上を、花柄の傘を差して歩く。子供の頃とは違うけれど、私は今でも花柄の傘を選ぶ癖がついていた。今では体にちゃんと合った大きさの、傘。雨の日は雨傘を。日差しの強い日は日傘を。一年中、毎日傘を持の強い日は日傘を。一年中、友達の間でち歩いている私。おかげで、友達の間では体が弱いということになってしまっては体が弱いということになってしまっている。実際、それほど体が丈夫ではないのだけれど。

交差点で足を止める。この横断歩道を

道の端まで下がって待つ。 行く。私は濡れてしまわないように、歩すれば、私の家まではもうすぐだ。車がすれば、私の家まではもうすぐだ。車が

行った。
そんな私の前を、誰かが駆け抜けて

見えたのは、口元。楽しそうに緩められた、口元だった。歩道から一段下がっ るべき場所。そこを、誰かが駆け抜けて るべき場所。そこを、誰かが駆け抜けて

になってしまっていて……。 振り続ける雨の中を、傘も差さずに。 信じられないような気持ちで、その人の が着る開襟シャツとスラックス。少の人が着る開襟シャツとスラックス。少 の長めの髪の毛が、細い体に良く似合っ でいた。でも、そんな全部が雨でびしょ

ぱり笑っていて。く飛び跳ねたりして。見える横顔は、やっく飛び跳ねたりして。見える横顔は、やっ

えなくなるまで、ずっと。背中をぼんやりと眺めていた。霞んで見私は、信号が変わってもしばらく、その私は、信号が変わってもしばらく、その

夕立ちは夜になる前に上がった。雨上夕立ちは夜になる前に上がった。雨上

た。
を済ませて、私は居間から外を眺めていを済ませて、私は居間から外を眺めてい

まるでスローモーションのようにゆっ

度のことは出来るようになっている。 手のお父さん。二人とも帰る時間がまち まちだから、家のことはほとんど私が やっている。お婆ちゃんが生きていた頃 お手伝いをしながら家事を教えてもらっ た。おかげで、今ではひとりでもある程

に、虫の鳴く声が響いてくる。網戸の向 だんだんと見えなくなってきた。代わり み込んでくる。 こうから、ひんやりとした風が居間に沁 外は薄暗くなって、雨に濡れた庭木も

のだろう? どうしてあの人は、傘を差さなかった どうして笑っていたのだろ

そんなことばかりを、ずっと考えてい

調を崩してしまっていたから。 て出来なかった。雨に濡れれば、必ず体 すのが当たり前だと思っていた。まして、 雨に濡れるのを楽しそうに笑うことなん 雨が降ったら、濡れないように傘を差

に迷惑をかけるのは、とても悲しかった。 仕事を休まなければいけなかった。二人 お婆ちゃんでさえ、辛そうに私を見下ろ 体調を崩せば、お父さんもお母さんも

いのだろうか? あの人は、雨に濡れても風邪をひかな もしそうだったとして

> したら? そこに車が来たりしたら? か? もしも雨に足を取られて転んだり も、あの濡れた制服はどうするのだろう 考えれば考えるほど、信じられなかっ

聞いて、感じて。 を差して歩いて。たくさんのものを見て、 れて。夏の暑い日は、二人で並んで日傘 買ってくれて、一緒に雨の中を歩いてく から出られなかった。お婆ちゃんが傘を 頃の私。傘を差さなければ、雨の日に家 お婆ちゃんの三人が、世界の全てだった 子供の頃の私。お父さんとお母さんと

うにかかった虹。七色、とか言うけれど、 覚えている。川沿いの道から、橋の向こ あまり見ることがなかった気がする。で てくれて。お婆ちゃんも褒めてくれて。 私には三色にしか見えなかった。後で学 も、時々は見ることもあった。ちゃんと て減って。お父さんもお母さんも安心し 体調を崩して寝込むことも、目に見え 雨はちゃんと上がる。雨上がりの虹は、

> と玄関へ向かった。 ま投げ出して、私は濡れた傘を乾かそう けることも出来ると教えてくれた。虹。 校の先生が、七色よりもずっと細かく分 考えることを諦めて、答えが出ないま

もあるから。 来るだけ焦らないように坂道を歩く。息 まる。今日も私は畳んだ傘を持って、出 が上がると、貧血を起こしてしまうこと 違って、朝はたくさんの人が坂道へと集 朝になって、学校に向かう。帰りとは

て来ても呼吸を乱したりしない。 と違っていつも元気な彼女は、駆け寄っ て、千代ちゃんが声をかけてくれた。私 「おはよ」と、私の背中をぽん、と叩い

こえてくる。朝の、見慣れた光景。 立ちが来るの?」 からは、たくさんの笑い声や話し声が聞 向けた。二人並んで、坂道を歩く。周り 「傘を持っているってことは、今日も夕 私は「おはよう」と返事をして、 顔を

「うん。朝の天気予報で降るって言って

ら良いけどね」 「ま、夕立ちなら少し待ってれば止むか

夕立ちはすぐに上がるのだ。 言われて、思うことがあった。そう、

「あのね」と、私は昨日の帰り道でのこ

る奴、多すぎて逆に分からないわ」 とを話した。 「へえ、誰だろ? そんな頭悪いことす

ストレートな物言いに、私は苦笑を返

「そんなん、楽しかったからじゃない? 「どうして笑ってたのかなって、思って」 私じゃないから分からないけど」

ないし良く分からなかった。 うには思えない。確かに、自分のことじゃ 少し考えてみたけれど、あまり楽しそ · · · · ·

「え、あ、そういうんじゃないんだよ? そういうのじゃなくて……」 気になる男の子だった訳?」

> 肩を落として、私も笑顔を浮かべる。 「うん。少し変わってるよね」 「ま、変わり者であることは確かね」 「冗談」と言って、千代ちゃんは笑った。 わざわざ、雨に濡れるなんて。

れば弱まる。傘を差しても濡れてしまう ないけれど、強い夕立ちは少し待ってい ただろうけれど。 れが台風とかであれば、合羽を持ってき なら、濡れなくなるまで待てば良い。こ し玄関で待つことにした。今朝の話じゃ あまりに強い雨足だったので、私は少 放課後、やっぱり雨は降り出していた。

「まだまだ止みそうもないわね」

何人かの人たちが傘を差して出て行った。 彼女は、練習日以外は時間が空くらしい。 きっと急ぎの用事とかがあるのだろう。 に帰ることはたまにあった。演劇部員の くことは出来ないけれど、途中まで一緒 私たちが玄関から外を眺めている間も、 今日は、千代ちゃんも一緒。遊びに行

> を屈めて、足元を気にしながら。 から、足取りも重そうに歩いている。 嫌そうな顔を浮かべて、溜め息を吐いて 「田舎はこれだから……」 身

千代ちゃんも、眉間にしわを寄せてぶ

夕立ちにあまり関係ない気もするけれど。 いのよね」 つぶつとぼやいている。田舎かどうかは、 「靴下に泥が跳ねると、洗っても落ちな

「すぐに手もみ洗いすれば、ちゃんと落

が聞こえた。 何気なく雑談を続けていると、笑い声

「そういうの面倒でさ」

泥だらけの校庭で、大きな声で笑いなが 男の人が何人か。土砂降りの雨の中で 線の先を追うと、サッカーボールを追う 「……頭悪い連中がいるわね」 げんなりしたような彼女の声。その視

「小学生でもやらないわよ、あんなこと」 そうこうしていると、職員室の先生が

ら、ボールを追いかけていた。

えてはいないだろうけれど。 とか言っているのだろう。雨の音で聞こ えた。多分、「風邪引くから止めろ!」 声を張り上げて何かを言っているのが見

だろうか?それも、あんなに楽しそう ときに外に出て、どうしてサッカーなの ている気がした。わざわざ雨が一番強い 何というか、本当に不思議なものを見

「……笑ってるね」

る先生ですら、どこか楽しそうに見える。 たことがあった。 るようだった。声を張り上げて怒ってい 「頭悪いにも限度があるわよ、あんなの」 じっとその状況を眺めていて、気付い そう言う彼女も、呆れながら笑ってい

「あ、あの人。今朝話した人がいる」 「どれ?」

「今ボールを蹴った人……ほら、あの髪

……あのバカか……。アレなら納

得……」

額に手を当てて、大きな溜め息を吐い

「知ってるの?」

たわ。おかげで怖い先輩たちに睨まれて 昔からあんなことばっかして、目立って て、今もあんまり立場が良くないんだけ 「羽田ってバカよ。同じ中学校出身なの

ね」だそうだ。 意に関して、どうも私は鋭いらしいのよ しかったりする。本人が言うには、「悪 そういう話になると、彼女はとても詳

差さなければ、雨に濡れてしまう。雨の 日にサッカーなんてすれば-舞っていれば嫌われることもある。傘を 立ってしまえば疎まれるし、自由に振 でも、同時に当たり前だとも思った。目 それを聞いて、私は少し怖くなった

「あ、また転んだ」

「転んでも笑うって、どんだけバカなん

てカーテンまで閉めていた。 めさせるのを諦めたらしくて、 という感じで苦笑いしていた。先生は止 「アホらしくなってきた。帰ろうか」 千代ちゃんは、呆れて笑うしかない 窓を閉め

「……もうちょっと待ってれば、きっと

「そう?」

変わらず笑い声が聞こえてくる。 雨は降り続いている。校庭からは、 雨足は、だんだんと弱まってきていた。

3. 分からないこと

なかったのは、多分千代ちゃんのおかげ り道で日傘代わりに開くこともあった。 だと思う。私の体がそれほど丈夫じゃな それでも私は傘を持ち歩いていたし、帰 いと知っている彼女は、誰かに訊かれる そんな私に奇異の視線を向ける人がい それから何日か、雨は降らなかった。

頭悪い理由よね、ホントにさ」 子が、羽田のこと好きだったんだってさ。 「羽田と同じ部活の先輩が好きになった

「それって……」

度にそう答えてくれていたから。

口下手

な私の代わりに。

遊びに誘ってもらっても付き合えない

でも良かったんでしょうよ。これでアイ 殴ってどうなる問題でもない気もするし。 良いんじゃない?」 ツが大人しくなるなら、優越感に浸れて 「先輩たちにしてみれば、理由なんて何 酷いし、理由になっていないと思う。

いている。 言外に示しながら、彼女は机に頬杖をつ 呆れ果てて笑うことすら出来ない、と

「大人しくなれば、ね」

なってくれる友達。彼女は、たくさんの とを話したがらない、それでも親身に

ことを知っていた。

わった頃からだったと思う。

数少ない友達。あまり自分のこ

なったのは、一学期の中間テストが終 に誘ってくれる。時々一緒に帰るように だけは理由をちゃんと話しても変わらず 子は理由を話さなくても、何度か断って 理由を、彼女にだけは話していた。他の

しまえばそれっきりだった。でも、

彼女

友達と、あの日のようにサッカーをして ボールを追いかける彼がいた。何人かの ていた。元気にはしゃぎ回っていた。 腕には包帯まで巻いてあった。でも、笑っ いる。顔に絆創膏が何枚か貼ってあった。 ち上げた。にやり、と笑うようにして。 そんな彼女の視線の先には、校庭で でも、彼女はそう言うと、口の端を持

ていた、あの人のことだった。念のため

に確かめると、彼女は黙って頷いた。

は、雨の中でサッカーボールを追いかけ

来た。アイツ、と言われて思い当たるの

ある日の昼休み、そんなことを言って

みたいよ」

「アイツ、やっぱり先輩たちに殴られた

生たちも苦労しないって話よね」 「殴られた程度で大人しくなるなら、 先

気付かないようでさえあって。 ければ、先輩たちに殴られたことに誰も い目がないようにすら見えて。傷跡がな 「……なんだか、本当に変わってるね」 腫れた唇で笑う彼は、何一つとして負

いる。 ず、在りのままに笑って日々を過ごして ていても気にしない。気にせず、変わら 目立ってしまうということも。でも、知っ に悪意を向ける人がいることも、自分が 彼はきっと知っているのだろう。自分

「好きになった?」

しそうに細められている。 からかうような、彼女の声。視線は楽

からなかった。はっきり言えることは か考えた。でも、説明出来る言葉が見つ 私は今のこの気持ちをどう説明しよう

「好きになるほど、良く知らないよ」 正直な気持ちだった。

とりで帰路に就いた。乾いたままの傘を手に持って、私はひをの日、夕立ちは降らなかった。

毎日は私にとって穏やかに過ぎていった。暑さも和らいで、夕立ちも降らなくなって、空が高く遠く澄み渡るようになっていった。衣替えの時期が来て、冬なっていった。衣替えの時期が来て、冬なっていった。衣替えの時期が来て、冬はみんな上着を脱いでいた。一度、日曜はみんな上着を脱いでいた。一度、日曜はみんな上着を脱いでいた。一度、日曜はみんな上着を脱いでいた。一度、日曜はみんな上着を脱いでいた。一度、日曜はみんな上着を脱いでいた。一度、日曜に千代ちゃんと買い物に出かけた。演問の他に、自分用の化粧水と乳液を買った。私はリップクリームと、やっぱり乳た。私はリップクリームと、やっぱり乳た。私はリップクリームと、やっぱり乳をでしている。

毎日を過ごしていた。 先輩たちに殴られた彼は――変わらずに 彼は――雨の日にサッカーをしていた、

どうして二学期になるまで気付かな

いう女の子も多いという。そして、私はしていたし、聞けば彼のことが好きだとつ人だった。常に数人で連れ立って行動かったのだろうと思うくらい、彼は目立かったのだろうと思うくらい、彼は目立

未だに彼と話すことがないままでいた。

屋休みに、千代ちゃんと二人でお弁当を食べる。自分でお弁当を作るのは、結構気楽だったりする。食べ切れなかったら残せば良いし、誰かのためでもないので気張る必要もない。千代ちゃんは、毎朝コンビニでパンを買って来ている。両朝コンビニでパンを買って来ている。両

「けど、ライバル多いからね。誰かに取かうように続ける。不満そうにそういう彼女は、私をから不満を

してよ?」してよ?」

苦笑いして、空になったお弁当箱をし「だから、そういうのじゃないってば」

て空き缶を投げた。飲み干すと、教室の隅のごみ箱に向かっまう。彼女は缶のコーヒーをごくごくと

「だから……」
「おし、ストライク! ……でも、ああ

にそういうのじゃないのに。

みたかったし」
ど、恋の橋渡しっていうのも一度やってど、恋の橋渡しっていうのも一度やって

日の決まりごと。 用の決まりごと。 このままだと本当にそういうことにさ

「いってらっしゃーい」と、ひらひら手「いってらっしゃーい」と、ひらひら手を振る千代ちゃんは、そのまま教室に残る。食後はだらだらするのが決まりごとる。食後はだらだらするのが決まりごとる。食後はだらだらするのが決まりにと

なのに……。

しているのだろう?どううして、あんなに気持ち良さそうに

教室の、私の席に戻るために。視線を廊下に戻して、私は歩き出す。

いつものように。いつもと同じように中に戻るために。

はイヤホンが伸びている。

顔を見ると、絆創膏は全部綺麗に取れ

さそうに。珍しくひとりみたいだ。耳に

生に寝転んで、目を閉じていた。木の下彼を見かけた。廊下の窓の下、中庭の芝

歯磨きを終えて教室へと戻る途中で、

で、木漏れ日を受けて、とても気持ち良

午後の授業が始まって、みんなが席に 着いている。古典の先生が教科書を読み 続けている。田そうな顔をしている人や、 熱心に授業の内容をメモしている人。折 りたたんだ手紙を回している人もいるし、 先生に見つからないように隠してマンガ を読んでいる人もいる。私はそんな中で、 ときどき外に目を向けていた。

方に向かっているみたいだ。

目立たなくなっていた。傷はちゃんと快る。腕の包帯は取れていて、青痣も随分ていた。腫れていた唇も、元に戻ってい

日差しの満ちている景色。午後になって風が出てきた景色。季節ごとに移ろっても、それほど大きく変化することのな

ちに殴られるようなことだってあるかも

しれない。外に出なければ。目立たなけ

雨の下に駆け出さなければ。それ

し、もしかしたら物が落ちて来たりするじゃあ服が汚れてしまう。虫だっている

ろう? それに、中庭とはいえ芝生の上

風邪でも引いたらどうするのだ

外で眠るのは気持ち良いかもしれない

かもしれない。この前のように、先輩た

私の生まれ育った街の、目に馴染んだ

Į

で来るのを、どうにかやり過ごそうとんで来るのを、どうにかやり過ごそうとんで来るのを、どうにかやり過ごそうと

4. 傘な

は何故だか気が重い。

は何故だか気が重い。

楽しかったはずの、
なってしまっていた。楽しかったはずの、

なっても上がらなかった。
昨夜から降り続いている雨は、朝に

「朝から雨で鬱陶しいわね」

だけ濡れてしまっていた。今日は、濡れなうにしていても、いつも靴だけは少し、「そうだね」と正直に同意をしていた。「をうだね」と正直に同意をしていた。が反論したかもしれない。でも今日は、から論したかもしれない。

「具合、悪いの?」ているなと、見たままに感じているだけ。ているなと、見たままに感じているだけ。

「ん……」

自然と足取りが速まる。と入る。校庭を抜けて階段を上がれば、と入る。校庭を抜けて階段を上がれば、として、教室に行けば、こんな気分もと、のしは薄れるかもしれない。そう思うと、少しは薄れるかもしれない。

ともつかないものに濡れて。脱いで抱えて、傘も差さずに、汗とも雨脱いで抱えて、傘も差さずに、汗とも雨

無休で一「羽田のバカ、本当に頭悪いわね。年中

こえた。
千代ちゃんのそんな言葉が、遠くに聞

思ってしまったのは。 あの人の後姿を――羨ましいと、そうあの人の後姿を――羨ましいと、そう

その手が、しばらく固まっていた。濡れ玄関で傘を畳んで、傘立てにしまう。

た傘を、じっと見詰め続けていた。

引っかかっていた。 授業の間ずっと、彼のことが頭の隅に

も。誰かと一緒でなくても。 学朝も走りながら、濡れながら、やっ

りしないだろうか? 風邪を引いただろうか? 濡れた制服と髪は、ちゃんだろうか? 風邪を引いたがあるがであるがでありたのだろうか? 何を思っているのないがありためにないがあります。

れた花柄の傘のことも考えていた。そう思うのと同時に、傘立てにしまわ

時間。寝つけずに、寝返りを繰り返してデジタル表示の時計の灯りだけが見える眠る前の短い時間。真っ暗な部屋に、

いた。

朝はあんなにも気分が重かった。傘を差すのが好きだった。傘を差して、

の音。濡れた路面を踏みしめる、靴の音。 の方。濡れた路面を踏みしめる、靴の音。 でいるようにする。 でいるようにする。 でいるようにする。 でいるようにする。 でいるようにする。

最近まで、ずっとそうだった。のが、大好きだった。嘘じゃない。つい穏やかに降る雨の中、傘を差して歩く

あの人のことを考える。

傘

顔を浮かべて。

うに笑っていた。ていた。笑っている友達の中で、楽しそでいた。笑っている友達の中で、楽しそ雨に打たれながら、ボールを追いかけ

いた。

、気持ち良さそうに目を閉じてを浴びて、気持ち良さそうに目を閉じてずに日々を過ごしていた。中庭で日差しずに日々を過ごしていた。中庭で日差しずに日々を過ごしていた。

傘を差して歩く人たちの間を縫うよう

155

やっぱり、笑顔を浮かべていた。

傘を差す私。差さない彼。

なお、笑っている彼。

雨に濡れないようにする私。濡れても

どうしてこんなにも違うのだろうか?

一体、何が違うのだろうか?

にして、制服を脇に抱えて駆けて行った。

現実には、こんなことを考えている私の方が、ずっと苦しい気持ちになってしまっている。対して、彼は今日も楽しそうに過ごしていた。多分、明日も笑顔で過ごすだろう。私と彼の違いというのは、結局のところ、それだけで――笑っているか、いないかの違いだけで――

腕で目を覆う。大きく息を吸って、ゆっ

寝返りを打ちながら、それでも眠れず、

くりと深く吐き出す。

雨に濡れたくなかった。濡れなければ、

を笑って過ごしたいと思った。私も、毎日羨ましいと、そう思った。私も、毎日

げていた。
天気予報は、昼過ぎから雨が降ると告

全てのものが等しく洗い流されても、私ていれば、雨に濡れることもない。他の誰にも迷惑をかけずに済んだ。傘を差し

は雨に濡れることはない。

それなのに、あの人は望んで雨に打た

当たり前のように傘を手にして、家を出る。傘はいつもより重く感じられた。 数室に行くと、千代ちゃんは他の子たちと週末の予定について盛り上がっていちと週末の予定について盛り上がっていた。私は椅子に座って、ぼんやりと外をた。私は椅子に座って、ぼんやりと外を

辛い気持ちになって、悲しくなってしまうかもしれないのに。苦しい思いをして、へ濡れてしまうのに。風邪を引いてしまれる。服も髪も、ぐっしょりと重く冷た

うかもしれないのに。

傘を差すだけで、平穏に過ごせるのに。

た。

今日最後の授業は、数学。機械的にノー今日最後の授業は、数学。機械的にノーた。粒の小さな、銀の針のような雨。夕た。粒の小さな、銀の針のような雨。夕からとは違って、冷たく沁み込むようなからとは違って、冷たく沁み込むような

雨は降り続いていた。教室でゆっくりと飲んで。それでもまだ、を返して、自販機で温かいお茶を買って、

粒で波紋を立てていた。灰色に塗りつぶ庭。ところどころに出来た水溜りが、雨視線を向けた先は、雨の降り続ける校観を履き替えて、傘に手を伸ばして。重い足取りで、玄関まで向かう。

うことのない、空と同じ色をした花の柄お気に入りの傘。雨に濡れても、色を失お気に入りの傘。雨に濡れても、色を失いない。

(O) 4

156

の 傘。

た傘。
私の代わりに濡れてくれた傘。私を

でも、どうしてだろう? それがとても、恥ずかしいことのように思えていた。 わない。濡れれば気持ち悪いし、風邪だっわない。濡れれば気持ち悪いし、風邪だった。

「どうしたのかな……?」 私は、今の私には、笑うことが出来ない。

なってやっと。 多分、分かってしまったのだ。今頃に

い空の色を映し出している。と気持ち良く張り詰めた布が、灰色でなどので、しわひとつ残っていない。ぴん、だので、しわひとつ残っていない。ぴん、

間。取り残されているのは、私ひとりだけ。る人たちは熱心に活動しているはずの時ちは帰ってしまっただろうし、部活のあちは帰ってしまっただろうし、部活のあいた。帰宅部の人たなので、誰もいなかった。帰宅部の人た

でいたあの人も、今日は見つからない。かに、他の音を全て吸い込んで降り続いかに、他の音を全て吸い込んで降り続い

そう。雨はもうすぐ、上がるのだ。切れ間が見え始めていた。少し待てば、切れ間が見え始めていた。少し待てば、

いをもっともらしい理由を付けて避けて

傘を畳んで、鞄と一緒に胸元に抱えて。気がつけば、私は駆け出していた。でも――

子供の頃の私。傘を差して歩くように

でも、そんなとき、お婆ちゃんもお母の泥だらけで家に帰ることもあって。傷だらけで。悩まずに笑って。恐れずに駆け回っで。悩まずにくって。恐れずに駆け回っ

か? 例えば今の私が、千代ちゃんの誘離を置いてしまったときのことを思い出して減ってしまったときのことを思い出して減ってしまったとなって、友達と遊ぶことが

部屋の中で過ごしていた。閉ざされたを、家の中で過ごしていた。閉ざされた私は体調を崩すことがなくなった。毎日私は体調を崩すことがなくなって、毎日のまっているように。

傘

は、雨の音だった。
外の世界に目を向けることになったの

と誘ってくれているようで。の音。それがまるで、「遊びにおいで」の音。それがまるで、「遊びにおいで」

靴を履いて。だから私は外に出た。傘を差して、長

とがないから。

傘を差してさえいれば、雨に濡れるこ

さんも、笑っていたような気がする。

「しょうがないね」って顔をして、微笑

それは確かに素敵なことかもしれない

しまっている。
毛はべっとりと額から頬、頬から首筋に

らけになってしまうかもしれないのに一てしまうかもしれないのに、転んで泥だ嫌なはずなのに、この後で風邪を引い

な振りをしていただけなんじゃないだろ

だって……。

降る雨に打たれなかった私は、小利口

雨に濡れた街の景色も、綺麗だったけ

過ぎった。 千代ちゃんが言っていた言葉が、頭を自然と、頬が緩んでしまう。

いのだから。

雨に濡れるのは、こんなにも気持ち良

喉が焼けるくらいに息が弾んでいる。

「楽しかったからじゃない?」
「楽しかったからじゃない?」
「楽しかったからじゃない?」

「楽しかったからじゃない?」

「楽しかったからじゃない?」

「楽しかったからじゃない?」

は歪んで滲んでぐちゃぐちゃになってい鳴っている。足はふらふらだし、目の前鳴っている。

でも、それでも、肌に直接当たる雨粒

変わってみたいと、そう思った。

たびに気の抜けた音を立てている。

髪の

濡れた服は重い。靴だって、踏み出す

でくれている。

熱を帯びた肌を洗って冷やして、

包ん

こんなにも優しい

の傘。 降る雨粒から私を守ってくれた、花畑

そう、心の中で呟いて。大好きな傘に、「ありがとう」。

5. 結

むことになってしまった。 ――結局その夜、私は熱を出して寝込

了

5 8

ير ا 33

157